

文化とイデオロギー

「文学の商品化」から見る George Gissing の美学

太田 隆太郎

1. はじめに

ジョージ・ギッシング (George Gissing, 1857-1903) の代表作である *New Grub Street* (1891) は、商品化が加速する 19 世紀後半の英国において、文学を取り巻く出版制度の変化を克明に記述した作品として評価されている。しかし、19 世紀後半の劇的な変化が、単に社会の物質的な側面だけでなく、人々の持つ想像力にも大きな影響を与えたことは重要である。本作における Reading Room という建物は、「文学的価値」を物質的に示す象徴として、これまでに度々批評家の関心を集めてきた。しかしながら、Reading Room という空間が、単なる物語の固定的な背景ではなく、むしろ登場人物の不安的なアイデンティティと連動する流動的な空間として描かれていることについては十分に論じられてこなかった。本報告では、19 世紀後半に活発化した社会改良運動と関連させながら、フィクションにおける表象としての Reading Room について多角的に考察した。

2. British Museum Reading Room

19 世紀後半の Reading Room のイメージに関して強い影響を与えたのは、1857 年に新しく改築された大英博物館 (British Museum) の Reading Room である。アンソニー・パニッツィ (Antonio Panizzi, 1797-1879) によって考案された新しい Reading Room は、ドーム型で多くの窓が備え付けられたモダンな建築物だった。その特徴を簡単にまとめると、Accessibility と Democracy の 2 点に集約できる。Accessibility に関しては、新しく導入されたカタログ制度がそれを象徴している。カタログは、利用者が膨大な書物の中からより効率的に目的の資料へたどりつくことを可能にした。また、Democracy に関しては、利用者を一部の限定された知識人からより多様な人々へと広げたことがその一例として挙げられる。これは、特に女性や海外からの亡命者の利用者の増加という点にも現れている。このような効率的な資料へのアクセスと公共性を支えているのは、Reading Room の空間的なデザインである。カタログを中心に円形に広がる空間は、図書館としての機能性を高めただけでなく、公に開かれた空間としてのイメージを人々の中に植え付けた。Reading Room におけるモダニティの核心は、まさにこの円形という空間的なイメージにある。

3. フィクションとしての Reading Room

新しい Reading Room のイメージは、人々の想像力にも大きな影響を与えた。ギッシングと同時代の作家ウォルター・ベサント (Walter Besant, 1836-1901) は、自身の小説 *All Sorts and Conditions of Men* (1882) の中で Reading Room という制度を、社会改良の構想である 'The Palace of Delight' の一部として位置づけている。1880 年代のロンドンでは、イーストエンドとウェストエンドの貧富の格差が誰の目にとっても明らかになっていた。そのような状況化において、Reading Room は、西と東の境界を超えるユートピア的な空間としての役割を期待されたのである。実際に、この小説で構想された慈善施設は、'People's Palace' として 1886 年にマイルズエンドにおいて実現された。このように、社会改良に関する運動が活発化していた 19 世紀後半のイギリスにおいて、既存の社会に対するオルタナティブを想像することと Reading Room という実験的な空間は切っても切り離せない関係にあったといえる。

4. プライベートな空間とパブリックな空間

1880 年代におけるロンドンを舞台とした *New Grub Street* で描かれる Reading Room は、ベサントの場合のように架空の場所ではなく、大英博物館という実際に存在する場所である。一方で、*New Grub Street* では、さまざまなキャラクターを通すことによって、Reading Room の空間的イメージが重層的に構築されている。例えば、実際的で新しいタイプの書き手ジャスパー・ミルヴェイン (Jasper Milvain) は、Reading Room を単なる学術機関としてではなく、むしろ人々との出会いの場として認識している。一方で古いタイプの作家であるエドウィン・リアードン (Edwin Reardon) は、Reading Room を自身の "home" (54) として位置付け、古き良き文化の集約地として認識している。ここで注目すべきは、Reading Room に対する認識の違いによって、新しいタイプの作家と古いタイプの作家が区別されている事である。*New Grub Street* における Reading Room は、小説の単なる部分的な設定なのではなく、むしろ物語の中心的な枠組みを形作っているのである。

5. グロテスクな空間

これを踏まえると、Reading Room という場所は、単に文化の中心を象徴する固定されたイメージではなく、むしろ社会の変遷を投影する流動的な空間として、小説の中に位置づけられているといえる。そのような Reading Room に内在している社会の変遷を上手く受容できないメアリアン・ユール (Marian Yule) の眼差しは、結果的に歪んだものとなる。学者である父アルフレッド・ユール (Alfred Yule) の物書きの手伝いをして暮らしているメアリアンは、「書くこと」が、もはや社会にとって意義があるような創造行為ではなく、単に市場における大量生産と同様のプロセスに成り下がってしまったことを嘆くようになる。それぞれの意味を消失した Reading Room の本は、“a trackless desert of print” (95) へと変容しメアリアンの人生を無意味に見せてしまうような強大な力として映し出される。さらに、メアリアンの眼差しは、人の管理によって成立しているはずの図書館を、まるで絶え間なく拡張を続ける自律した空間へと変容させてしまう。

Then her eye discerned an official walking along the upper gallery, and in pursuance of her grotesque humour, her mocking misery, she likened him to a black, lost soul, doomed to wander in an eternity of vain research along endless shelves. Or again, the readers who sat here at these radiating lines of desks, what were they but hapless flies caught in a huge web, its nucleus the great circle of the Catalogue? Darker, darker. From the towering wall of volumes seemed to emanate visible motes, intensifying the obscurity; in a moment the book-lined circumference of the room would be but a featureless prison-limit. (96)

新しく導入されたカタログが本来示すのは、Reading Room における効率性そのものであるが、そのような秩序は、知的労働の重圧に苦しむメアリアンに何の解決も与えない。むしろ、整序だった空間は、メアリアンの眼差しを通してウェブというイメージに変換される。Reading Room で一見自由に散策するように見える利用者も、メアリアンにとっては、ウェブに囚われた蠅にすぎない。また、メアリアン自身の疎外の経験も、Reading Room の円形のイメージとメタフォリカルに手を結んでいる。公に開かれた空間として構想された Reading Room のイメージに対して、ここで“darker”という言葉の反復によって劇化されるのは、出口のない円の中で永遠にさまよい続ける孤独と虚無の感覚である。

6. 結び

パノプティコン的な牢獄の姿を彷彿とさせる円形のイメージは、文化の中心である Reading Room できさえも牢獄や工場のように人間の精神と肉体を機械化する近代システムの一部に過ぎないことを暗示しているともいえる。しかし、このようなフーコー流の解釈は建物のイメージに一定の説明を与える一方で、*New Grub Street* における空間の表象は、ギッシングという作家の社会に対する反応という観点からより理解される。自身が貧困の劣悪な環境を経験しているギッシングにとって、Reading Room を社会改良への希望と楽観的に結びつける事は困難であったはずである。だが、ギッシング特異性は、そのような結び付きを客観的に非難することなく、むしろ社会改良を象徴する Reading Room の円形のイメージを再利用する部分にある。都市空間における疎外の経験を描いた *The Whirlpool* (1897) という後期作品のタイトルにも表れているように、作家活動を通じて円というイメージはギッシングにとって重要なモチーフであり続けた。なぜなら、秩序と無秩序を内包する円の両義的なイメージは、ギッシングにとってまさに絶えず変化する社会のプロセスそのものだったからである。ギッシングは、*New Grub Street* の中で、公と私、さらには東と西という境界を乗り越える突破口として考案された空間イメージを、逆に全てを分解し飲み込んでしまうような流動的な空間、まさに「渦」へと変換している。しかし、社会を観察する側である作家リアードンが「書く」ことを通じて“a cloudy chaos, a shapeless whirl of nothings” (110) に飲み込まれていくように、ギッシング自身もそのような「渦」の中に巻き込まれてしまう危険性と常に隣り合わせであることは重要である。このように、如何なる試みも無に帰してしまう円のイメージを描くことは、一方で社会改良に対するギッシングの消極的な反応であり、他方では、自分自身もそのような「渦」から逃れることができないという書き手の不安的な意識の表れでもあるのである。

引用文献

Besant, Walter. *All Sorts and Conditions of Men*. Oxford UP, 1997.

Gissing, George. *New Grub Street*. Oxford UP, 2016.

---. *The Whirlpool*. Penguin, 2015.